

(29)

| | | |
|----------|--|-----|
| 氏外(生年月日) | ハラ | ヒトシ |
| 本 籍 | 原 | 仁 |
| 学位の種類 | 医学博士 | |
| 学位授与の番号 | 乙第781号 | |
| 学位授与の日付 | 昭和61年10月17日 | |
| 学位授与の要件 | 学位規則第5条第2項該当(博士の学位論文提出者) | |
| 学位論文題目 | てんかんおよび熱性けいれん児の注意持続力とそれに及ぼす抗けいれん剤の影響 | |
| 論文審査委員 | (主査)教授 福山 幸夫 (副査)教授 柴田 収一, 教授 野本 照子 | |

論文内容の要旨

目的

てんかん児および熱性けいれん児の注意持続障害の有無と、注意持続力に抗けいれん剤がいかなる影響を持つかを明らかにするために、Rosvoldら(1956)のContinuous performance test (CPT)の一変法を開発し、てんかん児および熱性けいれん児の注意持続力を測定した。このCPTは、視覚刺激(丸、三角、四角、パツの組み合せ図)を使用する持続遂行試験である。

方法

対象児はすべて正常知能を持つもので、以下の3群よりなる。E群は、熱性けいれん児10名を含む無服薬患児34名(男17, 女17, 5歳8カ月~12歳11カ月)、D群は、抗けいれん剤による治療を継続中の、熱性けいれん児8名を含む、服薬患児27名(男13, 女15, 5歳5カ月~11歳10カ月)、N群は、ソフトサインを含む神経学的診察所見に異常なく、けいれんおよび行動障害の既往のない健康児30名(男15, 女15, 5歳8カ月~11歳11カ月)である。各群の被験児は全員、ビネー式知能検査を受け、CPTの結果を比較するために、その精神年齢(MA)によって以下の4組に分けられた。即ち、I組(MA: 6~7歳)、II組(MA: 8~9歳)、III組(MA: 10~11歳)、IV組(MA: 12~13歳)である。CPTにおける測定項目は、Omission Error(OE)とCommission Error(CE)である。これらより以下の様にError Index (EI)を算出した。

$$EI = \sqrt{(\%OE)^2 + (\%CE)^2}$$

$$\left[\begin{array}{l} \%OE = \frac{OE}{\text{正答刺激数 (24個)}} \times 100 \\ \%CE = \frac{CE}{\text{正当反応数} + CE} \times 100 \end{array} \right]$$

結果

E, D, N群の各組において、N群の注意持続力が最も優れていた。E, D群間のEIの比較では有意な差を認めなかった。Mann-WhitneyのU検定にて有意差を認めたものは、E-I vs N-I, D-II vs N-II, E-III vs N-III, D-III vs N-III ($p < 0.05$), E-II vs N-II ($p < 0.01$)であった。またE-II内の熱性けいれん児(5名)とてんかん児(5名)のEI, D-II内のフェノバルビタール服薬患児(5名)と非服薬患児(6名)のEIの比較では、有意な差は見いだし得なかった。

結論

従来正常知能のけいれん性疾患児の、学習障害、行動障害は、環境要因が想定されたり、抗けいれん剤、特にフェノバルビタールの副作用が強調されてきた。しかし、けいれん性疾患児には、元来注意持続障害が潜在する可能性がある。つまり、今回の研究で次の3点を明らかにすることができた。1) 服薬、非服薬にかかわらず、けいれん性疾患児の注意持続力は正常児のそれに比べて劣っている。2) 熱性けいれん児とてんかん児との注意持続力に差はない。3) フェノバルビタール服薬による注意持続力の悪化は認められなかった。ただし、年少児ではさらに検討の必要がある。

論文審査の要旨

本研究は、Rosvoldらの考案した持続遂行試験を基本にして、種々の改良を加えた独自の検査法を開発・標準化し、これを用いて、けいれん疾患児の注意持続障害の有無と、注意持続力に及ぼすフェノバルビタールの影響を要素的に分析した神経心理学的研究であり、学術上価値ある研究である。

主論文公表誌

てんかんおよび熱性けいれん児の注意持続力とそれに及ぼす抗けいれん剤の影響
脳と発達 第18巻 第5号
387～398頁（昭和61年9月1日発行）

副論文公表誌

- 1) てんかん児における注意欠陥状態
東女医大誌 55 (7) 566～570 (1985)
- 2) Personality and electroencephalography :
significance of epileptiform activity on
mass screening electroencephalography (性
格と脳波・マススクリーニング脳波における
てんかん性活動の重要性)
Brain Dev 5 (1) 20～28 (1983)

- 3) Dubowitz scoreによる新生児成熟度の評価に
関する研究. 第1編 合併症のない母体から
出生した新生児141例での検討—各種簡便法
との比較—
新生児誌 18 (2) 210～218 (1982)
- 4) 同 第2編 母体合併症の影響. 特に心疾患,
糖尿病, 妊娠中毒症について
新生児誌 18 (2) 219～225 (1982)